
ストレイ・フル

柏原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストレイ・フル

【Nコード】

N1129K

【作者名】

柏原

【あらすじ】

少年は言う。「この世界は非情だ」と。
少女は言う。「私は、私の護るべきものさえ護ればそれでいい」と。

魔界最大の人工都市、帝都ヴァルハラにも春が来た。

ヴァルハラ内にある学園が新入生を迎える準備を整えていく一方、

生徒達の間では不穏な噂が流れていた……。

プロローグ【神話】（前書き）

御閲覧ありがとうございます。

この小説には、多少残酷な描写が含まれています。

あと、これはあくまでファンタジーでありフィクションです。実在する団体等には一切関係ありません。

プロローグ【神話】

遙か昔、大いなる神は人間界と魔法界の二つの世界を創造した。

人間界ではその名の通り『人間』が栄え、独自の文化より生み出した機械技術を基盤としながら繁栄していった。

魔法界では『魔法族』と呼ばれる生命体が栄え、大気中を漂う『魔素』を利用した技術である『魔術』を基盤としながら繁栄していった。

二つの世界は空間の違いという隔たりに遮られ、数千、数万、数億年に渡って、一切干渉することはなかった。

干渉のきつかけとなったのは、人間界で起きたとある問題である。

人間界は科学技術の発達により、世界の支配者である人間の生活面での向上は著しいものだった。

しかし生活が豊かになればなるほど個人の欲求、愚鈍なる欲望は留まることを知らずに肥大化していき、遂には自分達の世界を破壊し始めた。

森林伐採により大地は枯れ、排気ガスにより大気は汚れ、河川に溶け込んだ有害物質により海は荒んでいく。

少しずつ、それでいて確実に、人間界は人間が住める世界ではな

くなっていった。

そして、今更どうしようもないところまできて事態の深刻さに気づき、漸く焦りを見せ始めた人間達はそれぞれの知識を寄せあつて打開策を練り始めた。

だが、科学技術に頼り自らの欲望を満たすことばかりに費やしてきた頭では、この窮地から脱する良案など浮かぶはずもなく、ただただ無駄な時ばかりが過ぎていった。

その様子を憐れに思った神は、助け船として人間に魔法界の存在を伝えることにした。

人間界を捨て、魔法界に移住するという選択肢を与えたのだ。

そして、人間が自らの過ちを振り返り、猛省し、魔法界にて新しい文明を築いていくことを期待した。

神より魔法界の存在を告げられた人間は歓喜し、これまでの世界を捨て去ることへの不安や後ろめたさを感じながらも、異世界への渡来を決行したのである。

結果は残念なもので、人間の本质がやはり欲深いものだとは証明するものとなった。

渡来して数年の間こそは自分達とは異なる文化、『魔術』を操る魔法族が繁栄する世界に戸惑っていたものの、暫くして慣れが出てくると、過去の繁栄が恋しくなってしまったのだ。

再び科学技術に手を伸ばした人間達。加えて魔法技術も取り組まれ、その欲望には拍車が掛かり、歯止めの効かない状態になってしまった。

再び世界が壊れ始める。同じ過ちを繰り返す。

その影響は当然、先住民である魔法族にも及んだ。

人間は自分達の勝手な都合を棚に上げ、あるうことか世界を失った自分達を受け入れてくれた魔法族の住処を侵略し始めたのだ。

魔法族も抵抗はしたものの、何分数が多い人間を押さえきれず、住処を奪われる魔法族は続々と増え続け、やがて魔法界の平和は、秩序は、法は崩壊した。

法を失った魔法界は『魔界』となり、法を失った魔法族は『魔族』となった。

これが、科学と魔術、人間と魔族が存在するこの世界における神話である。

あくまで神話であり、それが真実であるかは分からない。

だが、確かにこの世界は魔界と呼ばれ、人間がいて、魔族がいて、科学があつて、魔術がある。

そして確かに、退屈な時間を刻みながら、世界は止まらずに進んでいるのだ。

これは魔界に広がる最大の人工都市、『帝都ヴァルハラ』を舞台とした、とある少年少女の物語である。

プロローグ【神話】（後書き）

次話から本編です。

切り裂き魔事件？（前書き）

本編です。

まだ書き慣れてないので、誤字脱字、文章表現がおかしい箇所があるかもしれません。

切り裂き魔事件？

帝都ヴァルハラ。

広大な魔界に点在する人工都市の中でも最大規模の敷地を誇り、都市を囲むように聳える外壁の内部には、およそ二千万人も人間が収容されている。

帝都の中には複数の街が存在しており、それぞれの土地に居住区や市場、教育機関が設けられ生活規制がされている。

基本的に帝都の中央付近に分布している街ほど設備が良く、反対に外壁に近い外側の街ほど設備が悪い。最も外壁に近い街はスラム街となっている。

これには身分の差が大きく関係している。端的に言えば安全性の問題である。

もともと魔界は魔族の世界であり、人間が増加している現在でも帝都の郊外には多くの魔族が暮らしている。

当然その中には人間を良く思っていない者も多く、帝都が魔族の襲撃を受けることは珍しくない。

万が一外壁を突破された時、真っ先に危険が及ぶのはスラム街の住人だ。

一応スラム街にも警備兵が敷かれているが、外壁を突破出来る時点で一般の警備兵がどうにかできる魔族ではないので、結局中央区

から対魔族の専門家が駆け付けるまでスラム街は荒らされ続けるのである。

スラム街の住人からは不満の声が吐き出されるが、帝都の中央区……その中心に住まう『帝王』は一切耳を傾けず、依然この態勢は変えられることがない。

もともと人が密集する帝都だ。人が増えれば、その陰で犯罪も増える。

解消されない不満が火種となり、スラム街の住人やその他の住人を犯罪行為へと走らせてしまう。

次々と犯罪に手を染める市民達と、そうさせてしまっている政府による悪循環。

よってこの帝都は別名『犯罪都市』と呼ばれている。

例え学生でも、金さえあれば簡単に薬や拳銃が手に入るのが現状だ。

そんな事件など日常茶飯事と化している帝都だが、最近群衆を賑わしている一つの怪事件があった。「切り裂き魔あ？ あゝ最近話題になってる通り魔事件のことね」

「もう十人くらい斬られてるんでしょ？ しかも何人が死んでるって」

「マジで？ 半端ねえじゃん。まだ犯人捕まんねえのかよ」

「それがさあ、まだ犯人が男なのか女なのかさえ解ってないらしいよ。被害者は口を揃えて『何も見てない』の一点張りで」

「スゲー。そこまで行くと犯人尊敬しちゃうわ。暗殺のプロか何かよ」

「さあ？　なんか魔族が絡んでるって噂もあるよ」

「魔族かあ。じゃあ近々ヴァルキリー部隊見れるかもな」

「そしたら写メ撮らないと」

「うまく撮れたら俺にも送れよ」

目的の話題から脱線し、雑談を始めてしまった二人の学生を見て、少女は舌打ちしながらその場を離れた。

此処は学校。高等部である。

今は桜がキレイな季節であり、此処『紅蘭学園』の敷地にも、桜並木が校門から校舎に向けてのびている。

桜といっても天然の物ではなく、クローン技術によって生み出された人工的な物なのだが……素人の目では天然の桜と何が違うのかさっぱり分らない。

そもそも校門をくぐり抜けていく生徒達の大半は、これから始まる学園生活の事で胸いっぱい、桜の事など考える余裕がなかった。

本日は紅蘭学園の入学式。皺のない真新しい制服に身を包んだ新

入生達が、甘い期待と苦い不安を噛み締めながら、学園生活のスタートを切る最初の行事である。

ちゃんと友達が出来るだろうか？ どんな教師が担任になるのだろうか？ 新しい環境で上手くやっていけるだろうか？ 彼女は出来るだろうか？

様々な気持ちを浮かばせながら、新入生達は今、新たな一歩を踏み出そうとしている。

新入生は勿論、受け入れる側である二三年生や教師陣も様々な期待や想いを巡らせているのだろう。

学園全体が暖かなムードに包まれる中、此処に一人、鬱屈とした表情をしている少女が居た。

先程二人の男子生徒に話を聞いていた少女である。

意志の強そうな瞳と、腰まで伸ばしてある、ゴムで留められ尻尾のように揺れている茶髪が特徴的な女の子。

彼女の名は南條深夏。今年から紅蘭学園に入学することになった新入生の一人である。

「はぁ……所詮は噂ってことかもねえ」

呟きながら、深夏は深く溜め息をつく。

周りの雰囲気に対して、深夏のテンションは明らかに低かった。

別に、学園生活に対して全く関心がないわけではない。他の新生と同じように学生生活に期待だっしてしるし、多少の不安だっ抱いている。

しかし今、学生生活以上に気になる事柄が彼女の胸の中には渦巻いているのだ。

『切り裂き魔事件』

最近ワイドショーでもよく取り上げられる通り魔事件である。

昨年の12月後半に第一の犠牲者が出てから今日に至るまで、既に約十名が被害にあっているにも関わらず、犯人の手掛かりが一切掴めていないとのこと。

犯行はいずれも同様に人気のない路地裏で行われ、鋭利な刃物で全身を切り刻み、時には腕や脚を切り落とすという残酷なものだ。

被害者の所有物が事件後に紛失していることから、金品を狙った犯行だと推測されている。

これ以外に不可解な点が複数あることから、切り裂き魔事件は怪事件とされている。

深夏はこの事件の詮索に熱を入っていた。

原動力は決して正義感ではない。帝都での生活に置いて、正義感ほど重荷となるものはないだろう。

仮にも犯罪都市と呼ばれている帝都だ。正義感に振り回されてい

たら、それだけで人生が終わってしまう。

それに下手したら、暴力団や権力者から余計な恨みを買うことになりかねない。

正義を貫くには命を懸ける覚悟と、相応の力が必要なのだ。
それでは何故、深夏は切り裂き魔について調べているのか？

その理由は、先日切り裂き魔に対してかけられた懸賞金である。

調査を重ねてもなかなか尻尾を見せない切り裂き魔に業を煮やした政府は、遂に切り裂き魔に対して多額の懸賞金をかけたのだ。

それもD O A。つまり生死は問わないということ。

加えて、捕まえなくても確かな情報さえ掴めれば礼金が貰えるらしい。

金に困っている訳ではないが、学生となればいろいろ出費が嵩むだろうし、金はあるって困ることはない。深夏はちょっとした小遣い稼ぎと好奇心に動かされ、捜査を始めたのだった。

しかし、ほとんど素人な深夏の捜査は早くも行き詰まりを見せていた。

この前掴んだ『紅蘭学園が怪しい』という情報を頼りにわざわざ早起きして朝から生徒に聞き込みを行っているのだが、精々ニュースで流れた情報に色を付けた程度の情報しか手に入らず、不毛な時間だけがダラダラと過ぎていく。

「……そろそろ入学式が始まる時間ね。はあ、結局収穫無しかあ……」

聞き込み調査を切り上げて、会場である体育館に向かおうと深夏が思ったその時だった。

「やあ君。こんなところで何してるの？　もしかして体育館の場所分らなかったりする？」

突然背後から男の声が聞こえたかと思うと、次の瞬間には深夏の肩には腕が回されていて、紅蘭学園の男子生徒らしき少年が顔を覗き込んできた。

ナンパか？

深夏は鬱陶しそうに男子生徒を一瞥すると、

「大丈夫です。お構い無く」

素っ気なく言葉を返して男子生徒の腕からすり抜ける。

だが男子生徒も負けじと深夏の前に回り込んで引き留めようとする。

「まあまあ。そんな釣れないこと言わないでさ、ちょっと付き合つてよ。ほら、ちょうど俺らも体育館に行くところだし。なあ武ちゃん？」

そう言って男子生徒は深夏の背後に目を向けた。

深夏が振り返ると、そこにはもう一人男子生徒がいた。

声を掛けてきた男は軽薄そうな細身の黒髪なのに対し、背後にいた男はガツシリとした身体付きの長身の白髪であった。

黒髪だけなら殴り倒して体育館に直行出来そうだったが、白髪を殴り倒すのは深夏には厳しそうだ。

どうせこの様子では黒髪は逃してくれないだろうし、下手に抵抗して喧嘩になったら面倒だ。

喧嘩で負ける気はしない深夏だったが、登校初日から問題を起こすのは今後の生活に響くと判断。

「……分かったわ。体育館までなら」

「よしきたっ！　じゃあ話でもしながら行こうか」

馴れ馴れしく肩に手を回してくる少年が勘に障るが、深夏は渋々ながら二人の男子生徒と共に体育館へ向かうことになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1129k/>

ストレイ・フル

2010年10月11日21時28分発行